

メッセージ

池田大作

ロシア科学アカデミー東洋学研究所と東洋哲学研究所の共同シンポジウムが、「水と宮殿の都」サンクトペテルブルクにて開催されますことを、心からお祝い申し上げます。

一九九六年、貴研究所と私が創立した東洋哲学研究所が学術交流協定を交わして以来、両研究所は幾重にも交流の歴史を刻んでまいりました。とりわけ、貴研究所が所蔵される門外不出のペトロフスキー本をはじめとする珠玉の法華経写本を展示して、一九九八年に東京にて開催した「法華経とシルクロード」展におき

ましては、貴研究所の皆様の多大なご理解とご協力を賜りましたことを、改めて心より御礼申し上げます。

「法華経とシルクロード」展に出展してくださったのが宇宙根源のリズムを奏でつつ躍動し、その魂の輝きを放っている姿は、私の胸中に終生深く刻まれて離れることはありません。同展は、その後、オーストリア、ドイツでも開催し、高い評価を受けております。また昨年は、貴研究所が所蔵される西夏文法華経の写本・刊本を、西夏文「妙法蓮華経」——写真版（鳩摩羅什訳対

照)として創価学会から発刊させて頂きましたことも重ねて御礼申し上げます。

交流協定より満十年を記念して開催されるこの共同シンポジウムが実り多きものとなることを念願しております。

なお、本シンポジウムの開催を記念して、私の著書を中心に約二百二十冊の書物を、東洋哲学研究所ロシア・センター内の「池田文庫」に補充したことをご報告させて頂きます。

ロシアの加盟以来、初の議長国として開催された本年七月のサミットの大成功の報に接して、私は、今を去る三十二年前の一九七四年九月、世界の貴重な文化都市サンクトペテルブルクを初めて訪問した折のことを懐かしく思い出しました。

凶暴なるナチスが貴市を地上から殲滅しようと、九百日にも及ぶ猛攻を加えた日々。市民は多大な犠牲を強いられながら、断じて屈せず、勝利を勝ち取られたのです。この中で、貴研究所の幾人もの学者が、法華経写本を含む多数の貴重な文献を死守するため、その

上にうつぶして殉じていかれた事実は、人類の歴史に永遠に顕彰されていくことでありましょう。

尊き犠牲となられた四十七万五千人もの市民が眠る「ピスカリョフ墓地」を訪れた折のこと、私たちが献花する前に、すでに多くの花束が供えられていました。特に何かの記念日でもないのに、これだけ多くの人が墓参に訪れているという事実を目の当たりにしたとき、ここにも確かに、戦争を憎み、平和を祈る人々が数多くいることを強く実感したのであります。そして、平和を希求する名もない庶民のこの願いを断じて無にしてはならないとの決意が、今日に至る私の行動の原点の一つとなりました。

さて、今回のシンポジウムは、「人類的課題と宗教」をテーマに掲げております。論題は、法華経、仏教、儒教からキリスト教までを含む各宗教が、今日、人類が直面する平和、環境、ジェンダー等の課題にいかに取り組むべきかに及んでおります。

二十一世紀に入った今日も、五年前のアメリカで勃発した同時多発テロをはじめとして、世界各地でテロ

が頻発しています。「暴力と憎悪」の連鎖はとどまるところを知らず、人類を核を使った紛争、テロ、戦争の恐怖にまで陥れています。さらに、テロ、紛争等の「直接的暴力」の背景には広大な「構造的暴力」があります。極度の貧困と飢餓、人種、民族、文化、宗教、ジェンダーに及ぶ差別、人権抑圧から多くの難民を生み出し、地球次元での環境破壊がひろがっています。私の恩師である戸田城聖第二代会長は、かつて、このように述べました。

「仏教は、人類のため、全世界の民衆の幸福のための大法である。ならば、人類のかかえる課題の一つ一つは、そのまま仏教者の避けがたいテーマとなるはずである」と。

さらにまた、私が信奉する日蓮大聖人は、『立正安国論』という著作の中で、「一身の安堵を思わば先ず四表の静謐を待らん者か」（創価学会版『日蓮大聖人御書全集』三二頁）と述べています。

今日、人類が直面する課題の克服は、仏教のみならず、あらゆる宗教の共通なる目標であります。二十一

世紀において宗教が、平和と共生の地球社会を建設する源泉となりうるのか、それとも、分断と対立を招く負のエネルギーとなってしまうのか――。

人間生命の中には、暴力性、憎悪、貪欲、エゴイズムといった「悪の力」とともに、それらと拮抗する非暴力、慈悲、欲望のコントロール、利他心などの「善の力」が内包されております。宗教の本来の目的は、これらの善の力を開発し、強力に顕在化させつつ、人間と人間、人間と社会、そして人間と大自然を結び、人類の平和と幸福を創出するところにあります。

それ故に各宗教が協力しあい、現代文明を取り巻く分断と破壊の「悪の力」を打破するために、人間的使命の連帯を広げていくことであります。人々の生命の内奥から共生と創造に輝く「善の力」を引き出す宗教学間の「対話」こそが、未来に生きゆく青年たちのために人類社会の進むべき王道を開拓していくのであります。特に今日の人類を取り巻く状態に各宗教が深くかかわっている以上、「宗教間対話」こそ、「文明間対話」の主軸としての役割を厳然と担っていかなければ

なりません。

人類の平和と共生を目指して、宗教の担うべき社会的、人類的使命を論議されるこのシンポジウムが、両国の文化、学術への貢献のみならず、二十一世紀の文明社会を照らし出す「英知の光源」となることを期待しております。

(いけだ だいさく／創価学会インタナショナル会長)